

第三百九十六回 青葉会

平成三十一年四月二十五日（木）午後一時半～四時半 文京区民センター会議室

〈選者〉 ◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯

〈投句〉

伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 在間千恵 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇

〈紙上選句〉

星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 渡邊盛雄  
赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 重枝孝岳（新人） 庄司龍平 高橋敏郎  
早川允章 福島正明 村田くに子 山本三恵

《互選句》

六点

五点

◎ アルプスの水ひびき合ふ青山葵（わきび）  
切通し抜け海光の春日傘  
逃げ水の中へ中へとカーレース  
一灯（猛・孤・ゆ・允・正・天）  
孤舟（五・敏・灯・允・正）  
全（彦・五・弘・ゆ・灯）

（灯：「レースカー」の方がしっくりする）

花ありて春の雑草抜きかねつ

地謡（ちうたひ）の風と競へる春神事

（厳島神社で奉納）

老桜の片顔浮かぶ駅舎の灯

◎ 復員の父の夢見し桜かな

◎ 子規庵の菜の花脇の投句箱

（◎菜の花↓花菜の）

◎ 浮雲のたゆたふ浅間斑雲

市議選を床屋と語る春の昼

被爆者の抗議淡々遠桜

（福島第一原発からの避難民）

隴より隴へ抜くる先斗町

湧水に奔る魚影や風光る

花散るや地獄の門に裏のドア

迷ひなく竹の子弁当汽車の旅

◎ この春はなにやら人気万葉集

◎ 行き昏れて佐久の暮春を踏み迷ふ

◎ 花冷えや子規が命の六畳間

西行の往きし美山の山桜

（「往きし」↓「愛（も）でし」の方がいいと思う）

雨に濡れ貨物列車の花衣

魚屋の息子に一粟春選挙

◎ 沛然と春の駿雨や土匂ふ

一病を連れて万朶の花の下

◎ 竹の子の香りにつられ酒を酌む

清明に丘に登りて快哉す

張切つて手を上げ渡る新入生

見えぬ目に風に輝く若葉かな

杖借りて殿（しんがり）に躓（こ）く花の山

声弾む子ら桜散るランドセル

二点

◎ 全（真・紀・彦）

天牛（紀・彦・弘）

全（猛・孤・孝）

盛雄（紀・五・ゆ）

そらお（堅・紀）

猛（孤・孝）

忠彦（紀・ゆ）

全（紀・く）

恵洲（紀・灯）

ゆたか（灯・く）

一点

◎ 老い先を見渡す広野春の夢  
差し足の鷺涉りけり芹の水  
寄生木(やどりぎ)を透く春風や遠浅間  
春宵や旧き懐かしジャズを聴く

ゆたか(紀・敏)  
一灯(ゆ・天)  
全(紀・弘)  
啓子(紀・孤)  
全(紀・猛)

◎ 濃紫墓地の片隅すみれ草  
豆飯の緑美し朝餉かな  
豆飯や明るき一日(ひとひ)始まりぬ  
蜃気楼万葉人も見たるかな  
目を閉じて顔に落花と風受ける

規雄(猛・く)  
全(紀・天)  
けい子(堅・五)  
全(龍・天)  
天牛(孤・龍)  
全(堅・孝)  
盛雄(堅・紀)

◎ 入学の孫消えるまで見送れり  
花散りて人影失せし目黒川  
万葉の古書へのひかり風薫る  
(「へのひかり」↓「に脚光」)  
春の旅ノートルダムも見逃せず  
還暦の春たけなはに襲名す

そらお(紀)  
紀久男(敏)  
全(正)  
全(猛)  
全(紀)

◎ (三遊亭歌之助が圓歌を襲名。誕生日に見物后、祝杯挙ぐ)  
春の寄席トリは圓歌の四代目  
豪邸に紅白つつじの門の如(こと)  
行きつけの店のむしやぶる桜鯛  
素朴なる公魚佃煮陸奥みやげ

全(紀)  
忠彦(紀)  
孤舟(弘)  
五郎太(紀)  
全(紀)

◎ 憎しみの抑ふる難し聖週間  
潮待ちの往事茫々花の寺(輛の浦)  
猫の嗅ぐ昼に目張を割きし指  
山吹や尋ねて遙か乾門  
乾門御代を惜しむや花人ら

全(五)  
千恵(紀)  
恵洲(三)  
ゆたか(紀)  
全(孤)

◎ 一人去りまた一人去り春逝きぬ  
夕陽影岬に佇み春惜しむ  
付度して大臣辞むる四月馬鹿  
新元号発表に沸く花の宴  
我が庭も校舎も土手も菫の花  
光琳の切手で届く川床(ゆか)料理

全(天)  
天牛(紀)  
盛雄(龍)

● 次回青葉会

\* \* \* \* \*

五月二十三日(木) 井の頭公園吟行

集合 午前十時 吉祥寺駅前「はな子像」前

句会 御殿山コミュニティセンター・第2会議室(2階)

午後一時半～四時半

以上文責 紀久男

平成三十一年四月青葉会報

一 今回は弘子さん以下8名出席。投句12名。弘子さん寄贈のおつまみ、小生のおかき、缶ビール、純吟「雪椿」(新潟・加茂)を賞味しつつ、猛さんの進行役で開始。御覧のように一灯さん、孤舟選者、亜也さんが高得点でした。回覧は、

(一) 眞希子さんからの絵葉書(二) 丸紅の広告と並んだ三遊亭圓歌の日経「交遊抄」(柿木新社長と同じ鹿児島出身)(三) 「俳句あるふあ」春号等。

尚三月句会記録のワープロは猛さんにお問い合わせしました。

二 関係者近詠

パンくづで寒雀呼ぶホームレス

眞希子

兜子忌や今に不明の青き闇

盛雄

礼拝のオルガン弾きて風邪治む

全

毎日新聞兵庫文芸5月8日

沢庵石海に求めて初挑戦

全

若森京子特選 評もあり

蠟梅や相模湾から空晴れて

弘子

行基像に出合ふ万朶の花の下

盛雄

風削ぎて寒行一団過ぎにけり

全

朝一の眼に白妙の豆の花

全

鶴引くや石積み残す天守台

全

いまさらに行基の事跡花と咲く

健介

胴太き杉戸の馬や春兆す

全

花の下歌碑読み比ぶ念仏寺

全

剪定の缺に薔薇の木の香立つ

全

群れつつも所詮は一人豆の花

全

春立つとものみな春になる不思議

青史

翅ひろげ飛びそな風情花豌豆

全

木々芽吹くその喊声のけふ劇し

全

粹筋の千社札貼る花の古都

全

恋ふるほどのこともなき世の梅真白

全

臚真夜タクシー運ちやん避難民

全

転生の先は楽土か花ミモザ

全

(気仙沼で家流され高台に逃れた由)

全

遅日とはようも言ひたりまだ昏れぬ

全

美男美女華人濶歩の花の京

全

「熊谷陣屋」

「きさらぎ句会」 四月

冴返る至芸たつぷり吉右衛門

紀久男

焼鳥売る卯建の町家浪花旅

全

この地球太陽系のシヤボン玉

正明

常磐津一巴太夫を偲ぶ

全

専門は地震観測野の菫

全

春の路地太夫鬘貝の焼鳥屋

全

蒲公英の絮に掴まり旅に出る

全

一面の蕊色春のあとがきに

彦十

田に注ぐ水の勢ひや風薫る

全

妖しも子鬼も紛れて花の山

全

うるはしき令和始まり青葉風

全

舞台では刀改め春眠し

全

降りる駅変はり私服になる四月

全

春昼や孫のつくりし苺ジャム

全

春昼や孫のつくりし苺ジャム

全

「森の座」 5月号

全

降りる駅変はり私服になる四月

全

「きさらぎ句会」

全

降りる駅変はり私服になる四月

全

「きさらぎ句会」

全

降りる駅変はり私服になる四月

全

三 絹湫先生について(本名 川合友之)

「青葉会合同句集」二百回記念号に亡くなられた南平和夫さんが「絹湫先生を偲んで」と題して三頁余を寄稿されましたが、実際は万里子先生が原稿を完膚無きまでに書き直したものです。

要点の一部分を引用してみました。

「私の希ひは常に入門時の初心に帰り、美と美以外のものとの抱擁を表現してゆくことです。」

これが草田男の直弟子としての絹湫先生の終生のテーマであった。

・老人のみで未来議しけり初會議

・會議はまこと男の遊戯花の散る

・あまりに巨き數字を論ず稲光

・終へにける辭令人生花の散る

万里子先生は夫君のフオローと言うことで、この青葉会を親身に御指導いただいている。

夫婦仲は良くても、俳句は別ですと言う話も聞くが萬緑誌を見る限り、所謂相乗効果は否定出来ず

またそれが自然の成り行きである。

平成三十一年五月十九日

紀久男記